

BBC 「Pride and Prejudice, 高慢と偏見」 字幕分析 言語文化差異と翻訳との関係

矢田 陽子

Analysis of the Subtitle of BBC's *Pride and Prejudice* The Relationship between Culture Differences of Languages and Translation.

YADA, Yoko

Abstract

This article aims to analyze the Japanese subtitles of BBC's successful TV drama series *Pride and Prejudice* from translation studies's points of views; how original expressions in English are adapted into Japanese and what kind of methodologies are taken for that. Through this analysis, we will reach to know relationships between adaptation in translation and cultural differences in case of translation between English and Japanese.

要約

本稿は1995年に英国公共放送BBCで大ヒットし、その後日本を含む世界各国で放送されたJane Austen原作のドラマ「Pride and Prejudice 高慢と偏見」の日本語字幕に焦点を当て、翻訳の目標言語である日本語の言語文化に合わせた訳出で顕著に見られる箇所に着目し、なぜ目標言語（日本語）に合わせるような訳出がされたのか、どのような方略が選択されたのか、翻訳学の観点から分析し、映像における翻訳とはどのようなものなのかを検証し、言語文化差異と翻訳の関係を考察していく。

キーワード

言語文化 (Language and culture)

翻訳学 (Translation studies)

記号学 (Semiology)

1. はじめに—ジェーン・オースティンと「傲慢と偏見」

ジェーン・オースティンの名は、同時代を生きた英国の女流作家ブロンテ姉妹と比較すると日本では浸透していない。本国イギリスでも長いこと「大衆小説的」とみなされ、ごく普通の日常を描く手法がゆえに「文学的」ではないとの批評が尽きる事がなかった（新井、2008：8）。

実際、オースティン作品全般に共通しているテーマが「いかに経済力のある結婚相手を見つけるのか」である。これはオースティンが生きた時代の英国女性に相続権がないという限嗣相続制度が存在し、女性にとっての結婚は死活問題であるという社会的側面ゆえである（新井、op.cit：84）。原作者オースティン自身にとっても現実的な問題で、オースティンは当時の女性を取り巻く社会状況を背景に、英国の上・中流階級の女性の日常の情景をシニカル且つコミカルな表現に描きだした。

出版当時、オースティンの作品は文学としての高い評価を受けなかったが、20世紀後半になると「古典」として認められるようになり、国内のミドルクラスを中心に人気が高まった。その人気の要因となったのも、「自分を笑うセンス」であり、それは現在の英国人にもひきつがれ自己をシニカルな笑いとして表現するセンスを英国人は誇りとする（新井、op.cit：10）。それゆえに、オースティンの小説がミドルクラスに受け入れられたのだと考えられている（新井、ibid）。英国の当時の若い女性の「夫探し」をシニカルに笑うことで、現代の英国人もそこに自分達の姿を投影しオースティンの魅力を再発見しつづけてきた。その結果が記憶に新しい「ブリジッド・ジョーンズの日記」（2002）のヒットにつながった。

「ブリジッド・ジョーンズの日記」は「Pride and Prejudice」に登場する人物名とキャラクターを一部使用した現代の英国人女性の婚活ストーリーで、「Pride and Prejudice」の21世紀版の「翻案」とも言え、この映画の国際的なヒットによってオースティン小説の魅力をイギリス国内外で再確認され日本を含め国際的にBBCドラマ版が認知されることになった。

本稿の分析対象はあくまでもこのBBCドラマ版で、言語文化と翻訳の関係について考察する。小説の日本語翻訳版については映像媒体ゆえの方略傾向を見極めるために、Penguin Classicsの英語版と中野康司氏による翻訳の「傲慢と偏見（上・下）」（ちくま文庫）も参考にしていく。

2. 映像翻訳

2.1 映像における翻訳の傾向—目標言語への同化

映像翻訳では、起点言語の文化に深く根ざしている表現や言い回しは目標言語に合う表現に変えられる傾向にある。翻訳学では、どのような表現がどのような方略によって訳されたのかの事例分析が重ねられるが、これまでも米国のNida（1945）やドイツのNord（1992）らが方略論を定義してきた。近年では、言語文化の差異による認識と理解に焦点を当てた研究が導き出されてきている（矢田、2013b：20）。

翻訳方略といっても、翻訳には多くの種類が存在するため一括りにして論じるわけにはいかない。例えば、文芸翻訳と映像翻訳とでは翻訳の目的のそのもの設定が異なり結果として採られ

る方略も異なるため、文芸と映像とは区別して論じていかなければならない。

本稿で焦点を当てる映像翻訳では、そのターゲットはマクロとして捉えた「視聴者」であり、視聴者とその映像の文化的社会的知識がないという前提のもとに行われる（矢田、2013：331）（矢田、2014：67）。

映像翻訳が最も日常的に必要とされているものの1つがテレビニュースで、現地の責任者や街の声を伝える場合には吹き替えではなく字幕で伝えられる。例えばNHKでは、30分のニュース番組の場合には、1つの国際ニュースは平均2分半から長くて3分の割当てになっており、その2分から3分の中に与えられる字幕付きの映像も一回あたり最長12秒ほどであるため、最短且つ簡潔に表現することが何よりも追求される（矢田、op.cit：338）。

また映画における訳出では、観客の即時的な理解を追求するだけではなく、映像の進行リズムをも繊細に考慮する必要がある（マンディ、2009：304）、同じ映像翻訳でも特殊性はジャンルによってそれぞれに異なる。テレビ、映画に共通しているのが字幕作成での技術的な点で、一般的に最長1.5行までとされる。この設定は、我々が1つの字幕を読み理解するのに最長で12秒要することに起因している。12秒という限られた時間内が故に余剰的な表現を避け、簡潔で効率の良い「意味の伝達」を目指しているのである（Yada, 2009：116）。

一方、文芸翻訳では読者にとって認知し難いであろうと判断される情報には脚注による説明が可能で、脚注を置く事で読者次第の理解力に委ねることができる。また、起点言語の言語文化的要素を極力保持する方向に持って行くことも可能である。しかし、映像翻訳は即効的な意味の理解を目標と定めるがゆえに、誰もが理解できる平易な表現を目指すことで言語文化性の保持は二次的なものになる傾向がある（Yada, op.cit：315）。また、往々にして「意識」となる傾向が強く、映像においては「意識」も目標言語の視聴者や観客が理解するための必然の結果である。

翻訳学では、この「方略」を「操作 Manipulation」と表現するが、「操作」を否定的には捉えておらず、むしろこのような「操作」を駆使して「機能的な」訳を制作し、視聴者の理解に到達し目標言語できちんと機能する為に必要不可欠な手段であると考えられている（Carbonell, 1999：194）（矢田、ibid）。

2.2 翻訳の「操作 Manipulation」と「目的—スコpos」

ベルギーの翻訳学者ルフェーブルは、翻訳の目標言語の社会や団体が翻訳における「操作」をどの程度まで実行するのかの決定力を持っていると言明している。映像においては、テレビや新聞といったメディアの制作者側であり、映画であれば配給会社の意向によってどれほどの操作を課すのかが決定されるということである（Lefevere, 1999：30）（Yada, op.cit：78）。

「操作」がどの程度必要であるのかを最も把握しているのは翻訳者であるが、「翻訳の方向性」の決定に際し制作者側の意志の影響を強く受ける。つまり、「組織」の意向が「翻訳の方向性」も決定するわけである。

ルフェーブルは、決定力を持つ組織を「メセナ」と呼び、翻訳が個人的な判断によるものではなく、組織のイデオロギーによって大きな影響力を受ける事に着目した「メセナ理論」を説いて、翻訳と社会との関係性を研究する道を拓いた（矢田、2013a：344）。「メセナ」という命名は、古い時代に経済力と社会的ステータスの高い者や団体がパトロンとなって作家や芸術家を支

援し作品に好みや意見も反映させていた歴史に由来しており、現在にも異なった形で残存しているという解釈である (Lefevere, op.cit : 31) (矢田, op.cit : 345)。

「メセナ」である制作側がどのような方向性を望むのかは、制作者が目標とするもの、つまりイデオロギー次第ではあるが、これまでも言及しているように映像では限られた時間と画面空間で視聴者が的確に意味を理解していくことが目的であり、映像ほど意味が素早く機能し理解されることを目指す媒体は他に存在しない。映画や報道といった媒体種類に関わらず、「目標言語で意味が機能するように翻訳すること」⁽¹⁾を第一の目標とし、それに見合う様な翻訳方法が必要となってくるのである。つまり、「意味を機能させるために駆使する策」が「翻訳方略」であり、(マンデイ, op.cit : 123)、方略とは、この「意味が機能する」ためには必須のものであると考えられている。

この「意味の機能を優先させる」とは、現代翻訳論の中核である機能主義派⁽²⁾が定義した「スコポス⁽³⁾理論」の中核的理論の1つであるが、翻訳においては何よりもまず「翻訳の目的」に焦点を明確にし、その目的のもとに方略が選択された結果として「機能的で適切な訳」が産み出されるという定義である (マンデイ, ibid)。映像における翻訳の「目的：スコポス」は、常に視聴者がより明確に意味を認識し限られた時間で文脈を理解できることであり、組織的な力であるメセナに影響を受けながらも映像を受け取る側の理解を何よりも優先にして適切な訳を作り出すことである。

2.3 「リライトとしての翻訳」

方略を介して、必要な「操作」が施された表現は原文とは決定的に異なるものであるという考え方から「翻訳とはリライト（書き換え）の要素を強く持つものである」という見解が定着している (Hermans, 1999 : 95)。翻訳の目的を設定し、そのための方略を用いて産み出された訳は、文脈に沿いながら目標言語で「理解しやすいように」するわけで、それはまさにリライト、書き直しされたものである。欧州言語と日本語のような統語的に差異が大きい言語間では、この「リライト、書き換え」の傾向がある。目標言語の言語文化に合わせながら起点言語に特有の言語文化的要素を翻訳上に反映させることは困難であり、実際に翻訳者がオリジナル性を保持していく形を試みたとしても、メセナの役割を担う組織の意向によって翻訳の方向性が決まってしまう以上翻訳者の意向のみで訳を産み出して行くことは不可能で、必然的に本来の言語文化要素は削除されていく傾向にある。

スペインのマジョラルは、「特定の文化要素を含む表現は翻訳を介して理解されるものではない」として「文化伝達の不可能性」を示している。また、理解に達したとしても、それは目標言語における文化尺度によって理解されるものであり、受け取る側の個々が持つ文化尺度次第であるとし、翻訳によって文化要素が伝達され理解される可能性そのものを否定している (Mayoral, 1994 : 76)。

一方で、カタルーニャ語での字幕と文化についての研究者であるサンタマリアは、「特定の文化要素や言語文化性もキャラクターの一つとしてそれなりに受け入れられ理解されていくものであり、言語文化性を含む文化要素はその映画が表現しようとするものの一部で、観る者は各自の尺度でその価値を自分なりに調整しながら理解していく」と文化伝達の可能性について肯定的な

見解を示している (Santamaria, 2001 : 22)。

本来の言語文化性を翻訳に反映させ、認識と理解が得られる為にはどのような方法を採用すればよいかについては意見が異なる上に、欧州言語と日本語との統語的差異や言語文化差異も大きく影響を及ぼすという点を考慮しすべきで、欧州言語間で過去に定義されたものをそのまま当てはめることは不可能であり、欧州言語—日本語間に特化した方略定義が必要となってくる。

翻訳学研究は欧州を拠点として欧州言語内翻訳についての研究が積み重ねられてきたが、日本語との翻訳における研究事例が非常に少ない。それに加え映像に特化した研究も少ないため、本稿では矢田 (2009, 2013) が定義した日本語、フランス語、スペイン語間での映像翻訳の翻案方略を参考にしながら英語日本語間の映像における方略を定義し、BBC 「高慢と偏見」の日本語翻訳を事例分析に応用する。

2.4 映像における翻案方略

一般的な翻訳方略は、Viney and Darbelnet (1958) による仏語と英語間の翻訳の比較文体分析を発祥とし、その後1995年に借用 (borrowing)、語義借用 (calque)、直訳 (literal translation)、転位 (Transposition)、調整 (Modulation)、等価 (Equivalence)、翻案 (Adaptation) といった7つの方略が定義された。

定義の際の基準は、語彙や統語構造の2点で (マンデイ、2008 : 86—91)、統語的観点から類似性を持つ欧州言語内の組み合わせには応用できるが、Viney と Darbelnet も日本語のような非欧州言語との組み合わせを考慮していないため、日本語への翻訳に応用できるのか否かが要点となる。矢田 (2009, 2013) が定義した日本語とスペイン語間の映像媒体における字幕の為の方略を参考にしながら本稿の事例分析に応用できる方略を以下に定義し、実際の事例に整合しているのか検証していく。

| | |
|-------|---|
| 言語的拡張 | 本来は存在しない意味の語を加えて意味の幅を広げる。 |
| 言語的圧縮 | 言語的に意味を圧縮し、より簡潔な表現にする。 |
| 省略 | 訳す必要ない、又は、訳しても認識されるのには困難が生じると判断された場合、もしくは、限られた字幕枠にはまらない場合に訳す必要性の有無を精査し消去する。 |
| 置換 | 文化的に特有な名詞や固有名詞をより認知されやすい名詞で置き換える。 |
| 一般化 | 言語文化特有の表現や言い回しをより一般的な表現にする。 |
| 調整 | 起点言語の意味を視点を変えた表現であらわす。 |
| 特化 | 起点言語の文化特有の表現や暗喩を取って誇張するか、その特徴を活かして目標言語ではっきりとわかりやすく表す。 |
| 説明型 | 文化的要素を強く含む名詞を説明する形をとる。 |
| 俗語緩和 | 俗語、卑語、差別用語などをより緩和した表現にする。 |
| 創作 | あくまでも本来の意味に極力沿うように表現を全体的に創作しなおす。 |

これらの10つの方略で、まず「直訳」というカテゴリーを設定していないことに注目したい。日本語と欧州言語間での翻訳では、「直訳」は現実的に不可能となる場合が多い。「原文に忠実で

あること」が厳密に求められる翻訳の種類、医学を含む科学分野は、数字データや現象を正確に訳する必要から原文に忠実な「直訳」を基本とする。しかし、科学翻訳以外では何かしらの方略を用いて「操作」しない翻訳は存在しないと言っても過言ではなく、2つの言語の言語体系の差異が大きいほど「直訳」は機能しない傾向にある。よって、「直訳」は映像媒体ではありえないものとして本稿の方略定義では割愛している。

また、この10つの方略のなかで重複するように見えるものもある。「置換」と「一般化」であるが、「置換」の対象が「名詞」や「固有名詞」というように単位が「語彙」であるのに対して、「一般化」は、単位を全体的な「表現」を対象としており、「一般化」とは、目標言語における通例的・一般的な表現や言い回しに合わせていくことを意味する。また、「調整」は起点言語における表現をそのまま目標言語で表現することが難しい場合に、目標言語で視点を変えて訳する方法でどの言語の翻訳者も頻繁に選択する方略である。統語的に類似点の少ない日本語と欧州言語間のような翻訳では視点を変えることで同じ意味同じニュアンスを伝える事が可能になる。また「調整」は「良い翻訳かどうかの試金石となる方略であると考えられており、言語文化的に差異の大きい言語ほど使用される（マンデイ、op.cit：90）。それではまず、これらの方略が実際にBBC「Pride and Prejudice」の台詞に現れる言語文化性が日本語版ではどのように表現され、そのためにどの方略が駆使されているのかを検証していく。

3. 訳出事例分析

BBC「Pride and Prejudice 高慢と偏見」は各回50分の計6回、放送時間300時間のドラマであるが、その中から日本語訳で翻訳操作が顕著に見られると判断されたのは30の台詞であった。この30カ所で使われていた方略のなかで最も多く使用がみられた方略が、「置換」、「省略」、「調整」、「省略」、そして「一般化」で、「省略」と「調整」というように、他の方略と組み合わせた形を取るものも見られた。つまり「言語的拡張」などの方略は、あくまでも「置換」、「省略」、「調整」、「一般化」と併用して使用された。

「置換」とは、起点言語に特有の名詞や固有名詞をより認知されやすい名詞で置き換える方略であるが、なかでも顕著に見られたのが地名の置換で、特定の地名をそのまま訳さずに別の表現で置き換えられている。

また「省略」で顕著な傾向は、「置換」と同様土地名を省略することであり、基本的な傾向として日本語の字幕にする為に主要メッセージを堅持しながらも「余分」と判断できるものは極力削除している現象が見られることである。

「置換」、「省略」の次に多く見られた方略が「調整」である。「調整」は視点を変えた形で意味を目標言語にする方略であるが、翻訳者の力量とセンスがこの「調整」に見る事ができるといって良い。また、英国の社会文化に由来する独特な表現に使用されているのが「一般化」で、その名のとおり日本語でも理解しやすい一般的な表現に書き換える方略である。その他、「言語的拡張」との併用の事例みられた。

3.1 「置換」

起点言語に特有の名詞・固有名詞をより認知されやすい名詞に置き換える方略である。

| | | |
|---|---|----------------------------|
| 1 | Their uncle, she told us, is in trade and lives in Cheapside . | 伯父は商人で 下町 に住んでいるって。 |
|---|---|----------------------------|

これは、主人公エリザベス・ベネットの姉ジェーンと相思相愛であるビングリー氏の姉妹が、ベネット家は家柄や経済的レベルからも自分達とは釣り合わないことを示唆する台詞である。Cheapsideはロンドンの中心、金融地区の通りの1つで、現在の姿からは「下町」の形容はそぐわないがオースティンの時代には貴族は屋敷を郊外や地方に置き、ロンドンにあくまでも別宅を置いて現代よりも社会階級別の住み分けが明白で現在のロンドンの街の構成とは異なっていた。

また、文芸翻訳ならば地名であるCheapsideを「チープサイド」とそのまま訳して脚注を付けるという選択が採られるが、映像字幕は瞬間的な認識・理解を得なければならず、文芸種と同様の対策を取ることとは不可能である。字幕を読む視聴者が、より平易に「伯父がCheapsideに住んでいた」の意味とメッセージ性を理解できるようにするために「下町」と置き換えている。現代の感覚では「下町」にはより庶民が住居を構え、「山の手」には裕福な家庭が揃うといった感覚はうすれているが、英国ほどの「階級格差」を意識はしていなくとも「下町に住んでいる」という表現から、オリジナルの台詞にあるニュアンスを読み取れることができる。この「置換え」はそのような機能を意図している。

| | | |
|---|--|----------------------------|
| 2 | They would grace the Court of St James itself | 宮廷に出しても 恥 ずかしくありません |
|---|--|----------------------------|

次に扱うのは、The Court of St. Jamesを「宮廷」と訳している事例である。The Court of St. Jamesとは、The Palace of St. Jamesセント・ジェームス宮殿の名からつけられたロンドンの裁判所である。王室がバッキンガム宮殿に居を構えるまではThe Palace of St.Jamesが王の宮殿とされており、The Court of St. Jamesでは各国の大使の任命など英国主権のトップのための公式行事の場としても使用されていた。そのことから、「彼等はその優雅さでThe Court of St. Jamesをも飾ることであろう」という多少大げさな褒め言葉になったと解釈できる。英国人であれば、the Court of St.Jamesと聞けばそれがどのような場所であるのか理解可能であるが、非英国人には即自的な理解は多少困難で英国人と同様に理解することはできない。そこで訳者が採った方略がこの「置換」である。

もちろん、the Courtであるから本来は「宮廷」ではなく、かといって「裁判所」とするわけにはいかないが「王族や各国の代表を前にしてもひげをとらない」という意味合いを伝えるために「宮廷」と置き換えていることと理解できる。国内の社会的文化的要素に直結している名詞を国外の人間が同様のニュアンスで理解するには、このような「置換え」は必須の方略である。また、本来はgraceという動詞を使用していることからわかるように、「華やかに彩るであろう」と意味しているものを「出しても恥ずかしくない」というような極めて日本的な謙虚な言い回しに変える方略「調整」を使っており、目標言語である日本語の視聴者にとってごく自然に受け止められる形を目指したゆえんである。固有名詞の「置換」だけではなく、全体としての表現も視点を変えて目標言語での理解に合わせており、訳出の目的はなによりも目標言語での理解である

ことがわかる。

| | | |
|---|---|-----------------|
| 3 | I've had heard again from Caroline Bingley. It's now defined that they will stay in town for the whole winter. | 冬の間はロンドンにいるそうよ。 |
|---|---|-----------------|

次にtownという語の扱いである。これは主人公エリザベスの姉ジェーンが相思相愛であるはずのビングリー氏との仲を引き裂こうとする妹のCaroline Bingleyから「ロンドンに長く滞在することとなった、おそらく冬もロンドンで越すだろう」と伝える手紙を受けとったとジェーンがエリザベスに報告する場面である。

オリジナルの台詞ではtownと言っているところを、日本語字幕では「ロンドン」と置き換えている。興味深いのは、Austenの原作ではThe very first sentence conveyed the assurance of their being all settled in London for the winterとtownではなくLondonと明示しており、中野康司氏の訳でも「まず最初に、この冬はみんなロンドンで過ごす事に決めました」と訳し文芸版ではTownとはしていない点である（Austen, 2003：43）（オースティン、2003：76）。劇用に脚本化された台詞は時に原作とは異なった表現をすることもあるが、日本語字幕では「置換」という方略によって本来のLondonに戻した結果となった。次に、この例と同様に地名を別の言い方に置き換えている例である。

| | | |
|---|--|-------------------------------|
| 4 | When do you go into Kent ? We shall spend the Wedding night at Lucas Lodge , and then travel to Hunsford on Friday | いつ向こうへ？ 金曜よ、結婚式の夜をうちで過ごした後 |
|---|--|-------------------------------|

これはエリザベスの親友シャルロットが結婚する際の2人の会話である。

Kentを「向こう」と置換し、シャルロットにとっての実家であるLucas Lodgeを「うち」と訳している。そしてHunsfordを「省略」しFridayのみを訳に残している。実際、スペースに制限のある字幕制作で情報を繰り返し入れることは「無駄」であり、最小限の必要不可欠な情報を伝えるための簡潔な日本語を作り出すことが求められる。結婚して他州に居を移すという事実の理解に英国内の地名の理解は不必要で、具体的な名詞を「向こう」「うち」といった文化を超えて理解できる名詞に置換することによって、理解がより簡潔なものとなりえる。

| | | |
|---|---|----------------------|
| 5 | His name is Bingley and he will be in possession by Michealmas . | 名前はビングリー。9月には越してくると。 |
|---|---|----------------------|

次に、Michealmasを9月と置き換えている典型的な事例である。Michealmasは大天使ミカエルを祭るお祭りで9月29日に主に行われるが、収穫が終了し秋を迎えることから中世イギリスでも祭りが行われていた。「Michealmasの頃までに」というイギリス文化に根ざした表現を日本語ではシンプルに「9月」としているのも、オリジナル性の保持よりも日本語での認識を優先させた結果例の1つと言える。

| | | |
|---|-------------------------------|-------------|
| 6 | Mary, Play Grimstock ! | メアリー、ダンス曲を！ |
|---|-------------------------------|-------------|

このシーンは、主人公エリザベスの妹の一人リディアが、舞踏会で自分の好みの音楽で踊りた

いがためにピアノを弾く妹に大きな声で言うシーンである。Grimstockは英国のカントリーダンスの固有名詞で、オースティンが執筆した1700年代終盤から1800年代にかけて舞踏会で踊られたものであるが、日本語で字幕を見る視聴者がそれを認識する確率は非常に低い。

映画を含めた「映像」には、言語表現以外の視覚的認識にも期待できるという特色がある。フランスの記号学者バルトは、映像という視覚的メッセージと「字幕」という言語的メッセージは共示的に働いてメッセージを伝えたと定義しているが（バルト、2007：12）、我々は1つの画面で映像内容の「視覚的メッセージ」と字幕という「言語的メッセージ」を同時に受け取り、自身が自覚する以上に多種のメッセージを受容している。それゆえに、自分の文化ではないものを描く映像内容を理解してもらうために、制作者側は意味を伝える字幕は簡潔であろうとする。映像内容の視覚的メッセージの認識は個人個人の感覚によって異なるが、言語的メッセージはその伝え方次第で決定されコントロールが可能である。視覚と言語という二種類の情報を同時に与える映像媒体であるからこそ二種類の認識を考慮しなければならず、少なくとも言語表現に関してはよりクリアで平易に判りやすいものにすべきという見解が存在する。この事例は映像翻訳がこの二つの異なる認識を前提に作成されることを示している。

「置換」の6つの例を検証して判ることは、前出の2.2で述べたように、映像では、目標言語での認識つまり映像を見る者の認識・理解が何よりも重視される点である。「置換」は主に名詞の置換えであるが、翻訳目的の達成のために成される操作のなかでも最もシンプルな方略で、映像であるがゆえに行われるものであるということがわかる。

3.2 省略

「省略」は訳す必要性がないと判断される場合、また訳しても認識されるのには困難が生じると判断された場合、もしくは、限られた字幕枠にはまらない場合にその箇所を削除する方略である。

まず、具体的にどのような場合に「省略」が採られるのかを主人公エリザベスの父ベネット氏の台詞で検証する。事例7から9まではMr. Bennetが妻と娘達と自宅の居間でくつろぐシーンの中で繰り返し広げられる一連の台詞である。顕著に見られるのが「省略と調整」というような他の「方略」との併用で、字幕にするには余剰と判断される部分を省略し且つ根底の意味は変えずに日本語に調整していくという形が多く見られる。

| | | |
|---|---|-----------|
| 7 | When is it your turn, Lizzy? You can't be long outdone by Jane. | リジーはどうだね？ |
|---|---|-----------|

これは主人公のエリザベスに対して父であるベネット氏が発する台詞であるが、エリザベスの姉ジェーンが相思相愛のはずのMr.Bingleyと疎遠になり、結婚の可能性はないと姉妹の母が嘆く言葉に続いての台詞である。日本語字幕からわかるように、前半のWhen is it your turn, Lizzy?のみ訳し後半の「あまりジェーンに遅れをとるわけにはいかないよ」という部分を完全に削除している。姉であるジェーンの結婚話が事実上流れ残念だとネガティブな要因であるにもかかわらず、姉に続くように誰か見つけないのか？と言っているところにMr.Bennetの英国的なシニカルさが表現されている。しかし、実際の日本語字幕では「リジー、君の番はいつなんだい？」を

「リジーはどうだね？」と表現の観点を変え、方略として「調整」を使っていることがわかる。この台詞の長さはおよそ5、6秒だが、その間に読みきれぬ長さの字幕を作成しなければならないのも訳者が考慮する点で、究極的なメッセージ性を抜き出して端的により短い日本語字幕に訳していることがこの事例から理解できる。

| | | |
|---|---|-----------------------------|
| 8 | Here are officers enough in Meryton to disappoint all the young ladies in the country. | 士官が大勢いるからな。田舎の娘を全員失恋させてくれるさ |
|---|---|-----------------------------|

この台詞は事例7に続くものだが、ここで「省略」の対象となったのは、物語の舞台である田舎町 Meryton という地名である。「ここ」「そこ」といった指示詞で「置換」するまでもなく、シンプルに削除している。実際、物語の設定である Hertfordshire のみが実存する州で、街の固有名詞は作者の Austen が設定した架空のものである。それゆえに、この場合の街名は省略しても文化的メッセージ性の有無において大きな弊害はなく、この台詞で伝えるべき主要なメッセージと父ベネット氏のシニカルさは日本語字幕にそのまま含まれていることがわかる。

| | | |
|---|--|-----------|
| 9 | Let Wickham be your man. He's a pleasant fellow. He would jilt you creditably. | ウィッカムは適任だ |
|---|--|-----------|

つづくこの台詞では、オリジナルの英語表現の後半部分の He would jilt you creditably を完全に省略している。ウィッカム氏が必ずや君を裏切ると確信をもって言う台詞であるが、これは前の事例8で「軍人は全ての娘を失望させるには十分だ」と言っていることから、Mr. Bennet が8で伝えようとしている軍人へのネガティブな評価は二カ所で重複している。再度繰り返して字幕に入れる必要はなく省略を決断したと考えることができる。

また、前半の Let Wickham be your man と He's a pleasant fellow の二つの表現も、日本人にとって違和感なく認識できる表現にするために方略「調整」で視点を変えた表現にしている。He's a pleasant fellow はともかく、Let Wickham be your man は日本語の言語文化的ニュアンスに沿った形にはならず、完全に視点を変えて、He's a pleasant fellow と Let Wickham be your man の二文を組み合わせで作った字幕が「ウィッカムは適任だ」である。大胆な「省略」と日本語での認識に即した表現にする為の「調整」を駆使することで端的な字幕となった。

本来の表現には、ベネット氏の冷静且つシニカルな英国的表現が常に見られる。その特徴は、この台詞に続く方略「調整」の事例11にも見られるが、日本語字幕にする際に果たしてどこまでその特徴が残されているのか、残していけるのかが翻訳学の論点となる。日本語字幕を考察すると、短く簡潔な字幕にするという制約がありながら、ベネット氏のシニカルな観点を極力活かしてベストに近いものを作り出したと判断できるのではないだろうか。

| | | |
|----|--|-----------------------------|
| 10 | Are you in Meryton to subdue the discontented populace, Sir? Or to defend Hertfordshire against French? | こちらへは不満分子の対応で？ あるいは、防衛で？ |
|----|--|-----------------------------|

次に、エリザベスがパーティーで軍人の一人と話をするときの台詞で、歴史的要素を持つ表現がどのような日本語字幕となりえるのかを示すよい例である。

まず、前半部分の Meryton は事例4の Kent と同様に指示詞で置換え、「こちら」としている。注目するのは、後半の Or to defend Hertfordshire against French? である。本来の直訳は「それともフランスからハートフォードシャーを守るためですか?」であるが、それを「あるいは、防衛で?」と非常に短くしている。「対フランスの防衛ですか?」とすることも可能であるが、この会話の前後の文脈を闡明すると物語の進行上に「対フランス」とわざわざ加えてみても視聴者の物語の認識・理解力が深くなるわけでもなく「不必要な情報」と判断可能である。オースティンの時代700—1800年代の歴史的要素を日本語訳に反映させることで、かえって字幕を不必要に複雑かつ理解困難にする可能性もある。必要な意味であるのか否か、また字幕に本来の要素を残すべきなのか否かの判断と実行は、翻訳者に求められる力量でもある。

3.3 調整

調整とは、起点言語の意味を視点を変えた表現であらわす方略で翻訳者が常に使用する方略の1つである。着眼点を変えて別の表現で同等の意味、同等のメッセージ性を伝えられるのかが、翻訳者の技量が問われる点となる。

| | | |
|----|---|--------------------|
| 11 | Next to being married, a girl likes to be crossed in love now and then. | 結婚だけでなく失恋するのもいいことだ |
|----|---|--------------------|

これは、事例7の直前に父 Mr. Bennet が言う台詞である。極めて直訳に近い形で訳すと「いつの世も、女の子は結婚することの次に失恋するのが好きなのだよ」となるが、オリジナルの表現と日本語字幕を比べると、Next to being Married を「結婚だけでなく」、a girl likes to be crossed in love now and then を「失恋するのもいいことだ」としている。Next to being married も a girl likes to be crossed in love の部分も、日本語のニュアンスに合う形にするにはどうしても違う視点から表現せざるを得ない。「失恋するのもいいことだ」という訳は、飛躍しすぎだという批判も出る可能性もあるが、方略的観点からみるとこの部分は「言語的拡張」で本来存在はしていない表現を加えニュアンスを理解してもらうために意味を拡げている。字幕の長さの点から a girl likes to を訳すことなく一般論として表現するために、無主語表現を用いて「失恋するのもよいことだ」と簡潔な表現をも追求している。

| | | |
|----|--|------------------|
| 12 | Such squeamish youths are not worth your regret. | 気を落とすな。大した男じゃないさ |
|----|--|------------------|

次に挙げるのも父ベネット氏の台詞で、末娘2人によって長女ジェーンや自分の縁を妨げているという意味合いをエリザベスの発言に返す台詞である。Such squeamish youths are not worth your regret を直訳すると「そんな吐き気のする若者は君の後悔に値しない」となる。英語やその他の欧州言語では not worth ~ は日常的に使用する表現であるが、日本語では、欧州言語ほど「～する価値がない」や「～する価値のない～」という言い方はしない。そこで、この台詞を二つに分け、本来存在しない「気を落とすな」を加え「言語的拡張」している。言語的拡張は、これまで見て来たように、「本来存在しない意味の語を加えて全体としての意味の幅を拡げる」方略であり、「君には価値のない男だ」という励まし「気を落とすな」も加えることで、短い表現で

ありながらも意味の幅を拡げ、本来ベネット氏がいわんとすることを日本語で表現することに成功している。この事例もまた、映像翻訳では、忠実に訳すのではなく限られたスペースで同じ意味合いを表しながら目標言語でも平易に理解できる表現に書き換えることが行なわれていると考えてよいだろう。この事例と同じような例を他にもみてみたい。

| | | |
|----|---|---------------------|
| 13 | She's tolerable, I suppose, but not handsome enough to tempt me. | 許せない事はない。特別な魅力はないが。 |
|----|---|---------------------|

この事例は、エリザベスの相手役であるダーシー氏が物語の冒頭で地元の舞踏会でエリザベスと出会うシーンの台詞である。エリザベスが実は気にかかる存在でありながらただ見ているだけのDarcyに対して、親友のビングリー氏が「I dare say very agreeable (妹のほうは愛嬌があるじゃないか)」とエリザベスをダンスに誘う様に促すがこの台詞でダーシー氏がそれに応じてのものである。

ここで注目する箇所は、not handsome enough to tempt meである。ここを字幕では「特別な魅力はない」としている。Not handsome enough to tempt meは本来「私の気持ちをそそるほど美しくはない」であるが、つまり場面のコンテキストを考慮すると「ダンスに誘う気持ちになるほどの美しさではない」ということである。「Enough～」は英語を含む欧州言語全般に共通する慣用表現でtempt meも同様であるが、この二つを日本語にするには視点を変えて表現する必要があり、字幕では「特別な魅力がない」という表現となったと考えられる。参考までにオースティンの原文では、She is tolerable, but not handsome enough to tempt meで (Austen, 2003: 13)、中野氏による訳は、「まあまあだけど、あえて踊りたいほどの美人じゃないね」となっている (オースティン、2003: 22)。文芸翻訳では「あえて踊りたいほどの」とコンテキストを反映させた形で原文では存在しない表現を加えている。日本語字幕の「特別な魅力はないが」と比較すると、文芸翻訳は空間的制限を受けずに原文のニュアンスに忠実に日本語への訳出ができることを示している。この事例でも改めて映像翻訳と文芸翻訳の違いも事例は示していることを確認できる。

3.4 一般化

「一般化」は「調整」とは違い、意味の視点を変えることなく、より一般的な判りやすい表現に訳す方略である。

| | | |
|----|---|--------------|
| 14 | Go back to your partner. Enjoy her smiles. | 君は戻って彼女と楽しめよ |
|----|---|--------------|

この台詞はダーシー氏が、エリザベスの姉ジェーンに一目惚れをした親友のビングリー氏に対して言う言葉である。Enjoy her smileは非常に英語独特の表現であり、日本語に「彼女の笑顔を楽しめよ」と直訳するわけにはいかない。「彼女と楽しめ」とすれば日本語の言語文化のニュアンスに沿い日本の視聴者にとっては自然な言い回しで理解しやすい。一般化とは、このように目標言語の一般的な表現に合わせていく方略で、実際の何気ない字幕の一部にも見つけることができる。

| | | |
|----|--|----------------------------------|
| 15 | Our life holds few distinctions, Mrs Bennet. / But I think we may safely boast there sit two of the silliest girls in the country. | うちには英国1のバカ娘が2人いるのか/ 立派に自慢できるな |
|----|--|----------------------------------|

次に、Mr.Bennetが妻に向かって言う台詞では「一般化」と「省略」の二種類の方略を見ることができるといえる事例である。

まず、Our life holds few distinctions, Mrs Bennetという表現に注目したい。物語の中では、主人公のエリザベスや長女のジェーンとは異なり、末娘2人は「軽薄で知性派ではない少女」という形で描かれている。中盤には末娘リディアがベネット家にトラブルをもたらしていくが、物語の初めから、リディアの軽薄さはむしろコミカルに描かれている。

Our life holds few distinctions, Mrs Bennetの中のdistinctionsは「荣誉、名誉」「最優秀賞」という意味で使用する人が多いが、few distinctionsで「我々には名誉となるものは殆どない」という言い方をしている。しかし、日本語字幕ではこのOur life holds few distinctionsはほぼ省略され唯一「うち」という要素を残している。そして、But以降の後半部分はboastの本来の意味である「天狗になる」「鼻にかける」をより一般的な表現で「自慢できる」と訳し、But I think we may safely boast there sit two of the silliest girls in the countryと前半部分の集約である「うち」を統合して「うちには英国1のバカ娘が2人いるのか、立派に自慢できるな」と日本語字幕を形成している。

字数に制約がかかる字幕を作成するにあたり翻訳者はその台詞の中核的なメッセージは何なのかをまず判断しなければならないが、この場合は後半のBut I thinkに主要メッセージが含まれている。このシーンは映像が2ショットによって構成されており、But以降を2枚のショット用に二つの字幕に分けなければならない。「2人のバカ娘がいること」と「鼻にかけるほど自慢できる」の二つの意味を字幕にして且つベネット氏のシニカルで自虐的な表現を損なってはならず、「立派に自慢できる」とクリアに日本語に伝え結果としてこの作品の特徴である「シニカルな英国紳士の姿の要素」も本来のニュアンスを損ねることなく日本語によって表現されている。字幕を読む日本の視聴者も、本来の意味に近い形でメッセージや表現のニュアンスを受け取り作品そのものの良さを享受できると考えられる。

| | | |
|----|---|-------------------------|
| 16 | Aye, they have arms and legs enough between them , and are three of the silliest girls in England. | ええ、見かけは立派ですが、英国1のバカ娘です。 |
|----|---|-------------------------|

これは、父のベネット氏が舞踏会で末娘のリディアとキティがはしゃぐ姿を見かねて隣にいた友人に言う台詞である。「一般化」が使われたのは、前半のthey have arms and legs enough between themで、本来の意味は「彼らは腕と足は十分にある」であるがこれでは全くもって日本語では通じない。「体は大人だが、頭は子供である」という意味を日本語での一般的な形にしなければ字幕は機能しない。そこで、「見かけは立派ですが」という短めの表現にしている。一般化によって目標言語においてより分かりやすい形に変え、意味が機能する形で近いニュアンスを伝えている。

| | | |
|----|--|----------------------------|
| 17 | Not that I or anyone of my acquaintance enjoyed the privilege of intimacy with the family. We moved in very different circle. | そちらのご家族とは交流がないの。違う階級の方だから。 |
|----|--|----------------------------|

次に、古い英国的な表現と英国社会の特徴でもある社会階級要素を含む表現の事例である。この台詞はエリザベスの伯母のガードナー夫妻がダーシー氏の屋敷のあるピンバリーをエリザベスと訪れた際に、生まれ育った土地であるが階級が違うために地主であるダーシー家とはつながりがないと述べるシーンである。

英国的且つ時代性を含むものと判断されるのが、not enjoyed the privilege of intimacy with the familyである。the family、つまり、ダーシー家と親密な関係になる「特権を享受していない」と述べており、本来ならばまたは現代ならばwe don't have any connection with the familyと直接的に表現することもあるであろうが、そこをenjoy the privilege of intimacyと表現するのも時代性且つ階級性とも考えられる。

エリザベスの伯母ガードナー夫人は弁護士の妻であり、階級的に言えば弁護士はミドル・アッパーである。貴族階級支配階級ではないにしても知識層であり、それに見合った相応の言語表現をするはずであるが日本語字幕でそのような要素をどの様に反映させることが可能なのか。字幕では現代的にわかりやすく「交流がない」とし、the familyを「そちらの家族」とすることで女性的で丁寧さを表しながらも自分が位置する階級と、「向こう側」である貴族社会とをはっきりと一線を引いている。

また、We moved in very different circleは、我々は異なるサークル（社会）を動く、つまり「異なる社会に属する」と言っており、日本語字幕では「違う階級の方」と表している。更に、主語を本来のWeはなく「ダーシー家」を主語にしていることに留意したい。「我々は異なる階級だから」と訳すのではなく「あの方は違う階級だから」とダーシー氏を主語にすることで、自分が属する知的中流階級とダーシー氏の支配的上流階級との差異を当然の事として捉えている様を柔らかに日本語で表すことができています。次に、この事例と同じく現代英国社会にも根付く「Class社会階級」に起因する表現の事例をみていく。次の例は「一般化」ではなく、「特化」の方略に分類されるものである。

3.5 特化

特化とは、起点言語の文化特有の表現や暗喩表現を取って誇張するかもしくはその特徴を目標言語ではっきりと分かりやすくあらわす方略である。

| | | |
|----|--|------------------|
| 18 | Perhaps you have not had the advantage of moving in society enough. | あなた、上流階級をご存知ないのね |
|----|--|------------------|

この事例は、ビングリー氏の妹キャロラインがエリザベスに対していう台詞である。劇中でもたびたびキャロラインによるエリザベスやジェーンに対する高慢的な態度と物言いが繰り返し表現されている。ビングリー家はエリザベスのベネット家より経済的に豊かで映像でも門構えや衣装などにもその差が明白に描かれている。

ここで注目すべき箇所は、the advantage of moving in society enough で、Moving in society enough は「社会をしっかりと移動する」を「社会の内を十分に知る」と理解してよく、この society とはキャロラインが属す「上流階級」のことである。上流階級の利点を得るチャンスがない、つまり、「あなたは上流社会に属さない」という意味合いがあり、字幕では「上流社会をご存知ない」と表現されている。

21世紀の現代でも、英国は社会階級が可視化されている社会だが、特に言語にはその差異がはっきりと現れ人々の意識もはっきりしているといえよう。日本では「富裕層」という言い方もあるが、英国ではやはり Upper class, Middle class であり日本の「富裕層」というカテゴリーと同等のものとは言えない。歴史と文化に深く根ざす社会階級についての意識と言語の関係性は深く、翻訳にも大きく影響を及ぼす要因の1つである。訳者は言葉の意味だけではなく、言語に反映されている社会背景を考慮したうえでの訳出が求められる。また、「あなた、上流社会をご存じないのね」という表現は、映像に描かれるキャロラインの性格と人柄を正確にあらわしており、本来のニュアンスも日本語字幕にしっかりと含まれていると言っても過言ではない。映像に限ったことではないが、台詞の訳出はただ意味を訳すのではなくニュアンスやその登場人物の特徴をも把握して上手く反映させなければならず、まさに目標言語に合わせたライティングといえよう。

4. 考察

前章では計18例を方略別に分析してきた。最も事例が多かった「置換」については6例を分析し、主に地名、建築、そして曲名など英国に固有のものが、「下町」、「宮廷」、「ダンス曲」といったように文化を超えて理解できる名詞に訳されていた。また方略「省略」で見られた傾向は、「省略」のみの使用だけではなく他の方略と組み合わせているというものであった。「省略」に至る理由としては、より簡潔な字幕の形成をつくるために主要メッセージとしては余剰分であると判断されるものが対象となっていた。例えば、英国的なシニカルさや登場人物の特徴が現れていた事例7から事例9までは主人公の父が非常にシニカルで英国的なウイトに富んだ表現であったが、主要な意味やメッセージ以外は省略された字幕が形成され、翻訳における基礎的かつ重要なステップである「何を目的とするのか」に深く関連していることが考えられる。

第二章では、翻訳における「目的—スコpos」について述べ、翻訳が「何を目的とするのか」、「どのような読者、視聴者を対象とするのか」、「何を伝えようとするものか」といった訳出の指針となる目的は翻訳のジャンルによって異なり、映像では一般的な視聴者が即時的に字幕によって物語を理解できる訳を目指すことが大まかな「目的」となる。その結果として、「簡潔でわかりやすい日本語表現」が追求されることを確認し、「省略」は簡潔でわかりやすい字幕のためには必須の方略の1つで必要な操作であることが理解できた。

続く方略「調整」では、「省略」とは異なるタイプの「操作」が見られた。

事例12で検証したように、Such squeamish youths are not worth your regret を「気を落とすな、大した男じゃないさ」として意味合いを上げ「視点」を転換しており、同様の例を他に2例分析した。

英語には英語の慣用句が、あるがそれをそのまま日本語にするわけにはいかない。各言語にはそれぞれの文化に根ざした言語的な視点があり、英語と日本語の間にも視点を変えて訳さなければ意味はもちろんニュアンスも共有不可能な場合が多い。「調整」はまさしくその言語間の文化に根ざす感覚的な差異をうまく調整し、文化を超えて同じ内容のメッセージを伝えるための方略であることを確認できた。

そして本稿で多く見ることができた方略「一般化」は、目標言語での意味の機能を重視することを意味し目標言語で正確に意味が理解されることが重視されることを表している。これは、翻訳では意味が機能する事が最重要基準であるとする機能主義理論（2008）を裏付けるものであり、事例14から17までの4例で示された。一般化は、単に字幕という「空間的制限」をクリアするためにだけ使われるのではなく、「調整」と同様に二つの言語の文化の間に存在する差異を埋めようとする「肯定的な操作」である。例えば、事例16でthey have arms and legs enough between themを「見かけは立派ですが」という表現に変えて目標言語で一般的に通じる表現にすることで、字幕を読む者は本来の意味により近いものを受け取り即時的に理解していくことができる。

また「一般化」の事例では、英国特有の社会階級に起因する言語表現がどのように日本語に訳されているのかにも着目した。本来の英語での表現では、社会階級についてはオブラートに包んだ様な表現が見られたが、We moved in very different circleをはっきりと「階級」という言葉を使い、「違う階級の方だから」としており、日本語での一般的な言い方に変化させることで短く簡潔な表現にしていた。

この事例分析を通して再確認されたことは、翻訳は一般的に考えられる「翻訳」というより、特定の目的をもった「リライト」であるという事実である。映像は映像の特有の目的を有し、空間的な制限が課されるために簡潔な短い表現が求められる。しかしその制限を最優先して意味の欠落があってはならず、伝えるべきメッセージ性は極力同等でなければならない。そのために様々な方略が用いられ、時に複数の方略を駆使し自然な日本語表現の字幕が産み出される。

二つの言語文化の狭間で意味とメッセージ性の再構築を行う翻訳にとって方略は必要不可欠な手段であり、どのような方略がどのように使用されたのかを見極めることで日本語と外国語のそれぞれの言語文化と差異を再発見し、その差異を乗り越えて理解していこうとするコミュニケーションの姿を発見することができる。

おわりに

翻訳学と聞いてそれがどのような学問であるのか正確に把握している人は日本では未だ少ない。20以上の国で構成されるEUでは各国が自国の言語で欧州議会に参加し欧州としての政治経済体制を決定して行くため、翻訳・通訳学が戦後急速に発達した。まさに需要が成せる技である。しかし島国である我が国では、日常的に母国語以外でのコミュニケーションの必要性かられる状況が少なく、外国語教育界は警鐘をならし続けるも欧州列強国に準じるレベルにも達していない。そのような土壌では、意味を別の言語で伝えることとはどういうことなのかという視点は養われず研究の成長も遅れて行く。

本稿で検証・分析した「ドラマ、演劇」は我々の日常生活に必須のものでもなく、興味がなけ

れば一生触れなくともよいものでもある。しかし、日頃なにげなく鑑賞している映画にも文学と同様に日本語で意味を伝えようと取り組む翻訳者と制作者が存在し、彼等の知識、思慮そして決断によって制作される「字幕」によって我々は我々の言葉で多くの物語を理解することができるのである。

映像における翻訳は文芸翻訳と決定的に異なると繰り返し言及してきたが、流れて行く映像の上に置く字幕を読む秒数は6秒ほどで、その短い時間と空間で正確に意味を理解しストーリーの理解に導くことが字幕の使命で、視聴者はこのツールなしには異文化の映像・映画は理解できない。しかし、二つの言語には必ず差異は存在し、時に大胆な翻訳的操作を加えなければ短い表現のなかでの解釈は得られない。本稿ではその「大胆な操作」である方略を検証し、どのような箇所が使われどのような結果が得られているのかを分析した。そこから見えてきたのは、翻訳とは目標言語での理解を何よりも重視した「リライト」であり、言語間に存在する差異を認めた上での意味の「再構築」であるということである。

言葉と言葉をつなぎ、文化の間で仲介的立場を取る翻訳というものを多角度からみつめることで、異文化の理解を得るだけでなく自己の文化を再確認し、我々の思考が日本語という言語に深く根ざし形成されていることを改めて理解していくことが可能となる。翻訳学とは差異のなかから自己の文化を見いだしていく学問の一面を持つといえる。

注

- (1) 英国のニューマーク (1981) が定義し「コミュニケーション重視の翻訳」とも言われ、オリジナルの読者が得たのと、できるかぎり近い効果を与えようとする翻訳で、目標言語の理解を優先させるものである (マンデイ、2008 : 69)
- (2) 機能主義とは、翻訳では意味の機能性は翻訳にとって最重要となる基準であると定義する (マンデイ、2008 : 122)
- (3) スコポス (Skopos) とは、ギリシャ語で「目標」「目的」を意味する。

参考文献

- Austin, Jane. (2002). *Pride and Prejudice*. Penguin Classics.
- Barthes, R. (1977). *Image, Music, Text*. London: Fontana Press.
- (1995). *An introduction to social constructionism*. London: Routledge.
- Carbonell, O. (1999) *Traducción y Cultura de la ideología al texto*. Salamanca. Ediciones Colegio de España.
- Hall, S. (1980). *Culture, Media, Language*. London: Unwin Hyman.
- Hatim, B. and I. Mason. (1990) *The translator as Communicator*, London and New York. Routledge.
- Hermans, T. (1985) *The Manipulation of Literature: Studies in Literary Translation*, Beckenham: Croom Helm.
- (1999) *Translation in Systems*. UK.
- Mayoral, R. (1994) 'La explicitación de la información intercultural' in Amparo Hurtado (ed) *Estudis sobre la traducció*. Castellón, España. Publicaciones de la Universitat Jaume I. 1994.
- Molina, L. (2001) *Análisis descriptivo de la Traducción de los Culturema árabe-español*. Tesis Doctoral. Universitat Autònoma de Barcelona. Barcelona.
- Nord, C. (2001). *Translating as a purposeful activity*. Manchester: St Jerome publishing.
- Santamaría, L. (2001) Tesis doctoral. *Subtitulació i referents culturals. La traducció com a mitja d' adquisició de representacions mentals*. Barcelona. Universitat Autònoma de Barcelona. 2001.
- Yada, Y. (1990) Tesis Doctoral. *Análisis Semiótico-Cognitivo de la traducción de referents culturales en la*

subtitulación del español y francés al japonés:Laissez-Passer y Belle époque. Departamento de Traducción e Interpretación.Universitat Autònoma de Barcelona.

新井潤美（2008）『自負と偏見のイギリス文化— J オースティンの世界』岩波新書

池上嘉彦（1990）『記号論への招待』岩波新書

池上嘉彦・山中桂一・唐須教光（2008）『文化記号論 ことばのコードと文化のコード』講談社学術文庫

オースティン、ジェーン（2003）『高慢と偏見』（中野康詞 訳）筑摩書房

マンデイ、ジェレミー（2009）『翻訳学入門』（鳥飼玖美子監訳）みすず書房

バルト、ロラン（2005）『映像の修辞学』（蓮實重彦、杉本紀子 訳）ちくま学芸文庫

矢田陽子（2010）「字幕翻訳の記号学的分析—アルモバル映画と記号学」、『翻訳研究への招待』第4号、日本通訳翻訳学会、pp. 19-39.

矢田陽子（2013a）「テレビニュースはチャベス語録をいかに伝えたのか」、『Sophia Linguistica 61』、上智大学国際言語情報研究所、p331—p349

矢田陽子（2013b）「日西・映像翻訳方略定義の記号学的検証」、『翻訳研究への招待第9号』、日本通訳翻訳学会、p19—p36